

地域の子どもたちの健やかな成長を願って

けんもり 特別支援教育だより

岡山県健康の森学園
支援学校
編集：教育支援係

第2号
平成29年6月9日

障害者の就労に向けて

1 はじめに

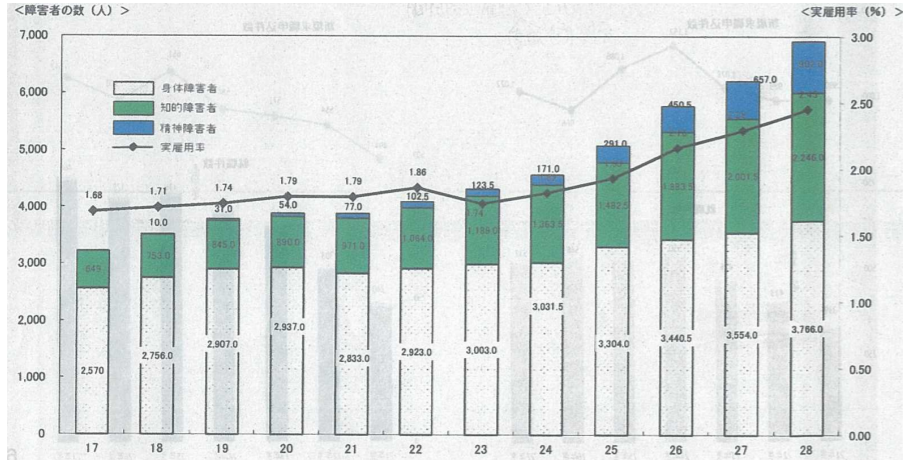
岡山県健康の森学園支援学校（以下、本校）高等部生徒たちの卒業後の進路決定に関わるようになり、就労に向けて日々の学習の重要性を実感しています。企業の方のお話や各種学習会で学ぶうち、社会の流れや就労する者に求められる姿から、「本当に必要な力は何なのか」「本校在学中、児童生徒に何をねらって学習を設定していけばいいのか・・・」と考える日々が続きました。幼児児童生徒の保育や教育に携わり、日々悩み、向き合っている方々に、障害者雇用という視点から、「今、皆さんが行っている保育・学習活動の全ては、目の前の幼児児童生徒の10年後20年後につながっていますよ」ということをお知らせします。

2 障害者雇用の実際

2017年5月29日、『厚生労働省は、民間企業に義務付けられている障害者の雇用割合（法定雇用率）を現在の2.0%から2.3%に引き上げる方針を固めた。』という報道がなされました。現在、雇用義務の対象は、身体障害者と知的障害者です。2018年4月から統合失調症など精神障害者も加わり、対象者数が増えます。政府は、企業の雇用状況を見極め、2021年3月末までに法定雇用率を2.3%にします。障害者の就労意欲は高く、職場のバリアフリー化など支援体制もすすみ、就職件数、新規求職者数は年々増加しています。政府は、働き方改革で、病気や障害と仕事を両立できる社会作りを掲げています。障害者の法定雇用率を達成している企業が半数に届かない（2016年6月現在、48.8%）ため、働き方改革を通して、障害者の就労を後押しする狙いがあります。

3 岡山県の動向

- 岡山労働局のまとめによると、障害者雇用の状況は
- 民間企業の雇用状況（法定雇用率2.0%） 実雇用率 2.45% <全国4位>
 - 法定雇用率達成企業割合 53.2% <全国33位>
 - 雇用者数は8年連続で過去最高を更新



障害者雇用の状況
(岡山労働局)
平成28年6月1日現在

4 安定した就労のために『職業準備性』について

『職業準備性』とは、「個人の側に職業生活を始める（再開も含む）ために必要な条件が用意されている状態」を示します。

5 「職業準備性」のピラミッド



- ⑤職務への適性
職務遂行に必要な知識・技能
- ④挨拶、返事、報告、連絡、相談
身だしなみ、規則の遵守、体力
- ③感情のコントロール、注意されたときの謝罪
苦手な人への挨拶
- ②基本的な生活リズム
金銭管理、余暇の過ごし方、移動能力
- ①食事、栄養管理
体調管理、服薬管理

出典) 相澤(2007)を一部変更して引用「現場で使える精神障害者雇用支援ハンドブック」 p198.2007 を基に作成

職業準備性を高めていくためには、技術的な面よりも、まず基本的な労働習慣を身に付けることが必要とされます。そして、その基本的な労働習慣を支えているのは、保育所・幼稚園・認定こども園、小・中学校の頃から繰り返し経験する中で習得していく、健康管理や基本的な生活リズム、対人技能といったスキルです。

「早寝早起き朝ご飯」や「お友だちと仲よく遊ぶ」、「悪いことをしたら『ごめんなさい。』と言う」「謝罪を受けたら『いいよ。』と許す。」「名前を呼ばれたら『はい。』と返事をする」・・・、どれも社会参加の際、自立した生活を支える（安定した就労生活を支える）大切な学習です。

- ピラミッドの各段階で課題となる内容の例をあげると、
- ①では、通院や服薬を指示なく中断してしまう。等
 - ②では、休日に遊びすぎ、週明けに休んでしまう。趣味と仕事のバランスが付けられない。等
 - ③では、人と接することが極端に怖い。困ったときに相談できず、黙ってフェイドアウトする。苦手な人との折り合いが付けられない。等
 - ④では、極端に受け身である。自分から報告・連絡・相談ができない。等
 - ⑤では、どんな仕事があるか知らない。就職活動の進め方が分からない。等
- 職場でうまくいかないと感じる時、どこに困り感があるのか、このピラミッドを参考にアプローチを探ってみるとポイントが見つかりやすくなります。

6 おわりに

- 高等学校や本校高等部を含む特別支援学校高等部在学中に、社会に出て行く準備として、
- 仕事と自分との関係
 - 体験と振り返りの大切さ
 - 自分にとって仕事とは何なのか？
 - 10年先に自分はどうなっていたいのか？
 - 利用できる就労支援サービス
 - 最も一般的な就労支援窓口はハローワーク
 - 障害を開示するかしないか？
 - 障害者手帳を取得するかしないか？
- これらを深められていけば、学校卒業後、必要な支援を受けつつ、安定した「自分らしい人生」を送ることが可能になるのではないかと感じています。

(文責 高等部 福田和美)